

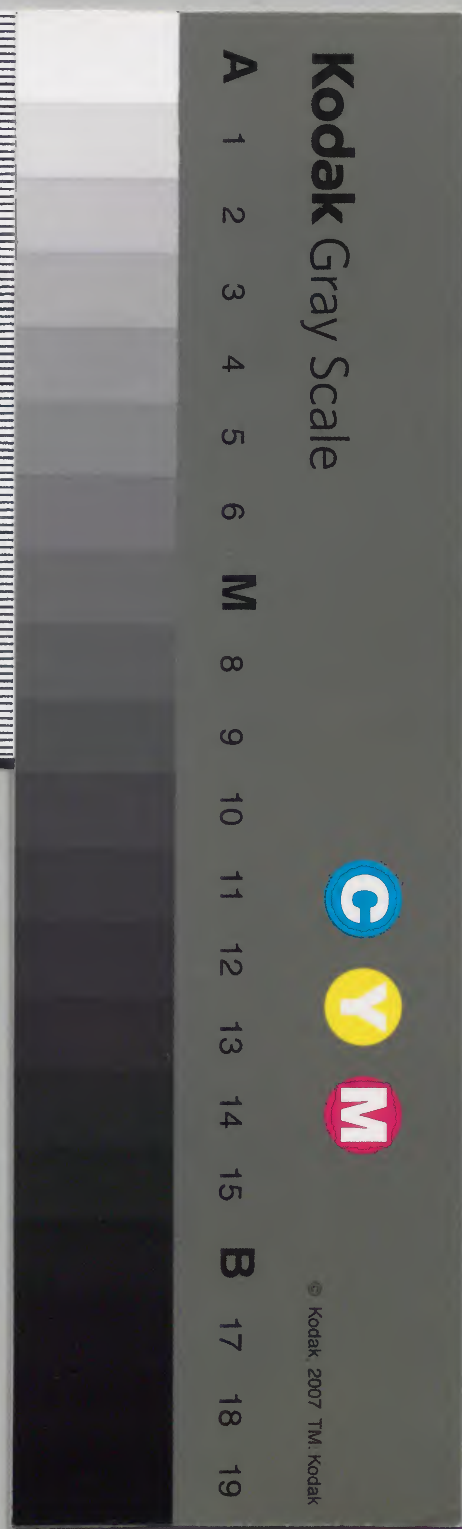
嬉遊笑覽 三

農商務省  
圖書  
第九三〇號  
共一六册

太政官文庫  
和書門  
八二〇八  
類號函架册  
一六

內閣文庫  
和書  
八二〇八  
類號册架  
函一六

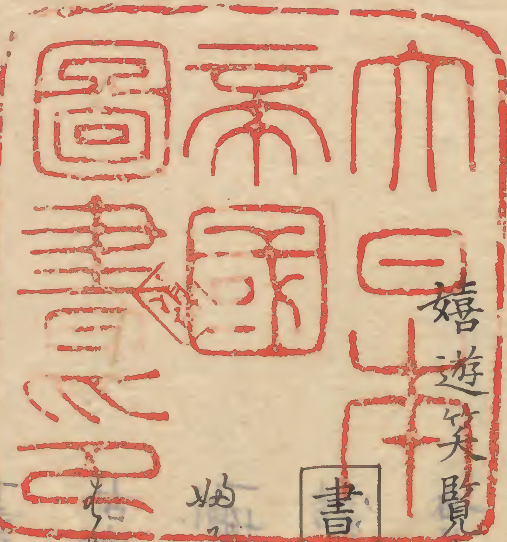
內閣文庫	
番號	和 8208
冊數	16 ( 5 )
函號	184-10











嬉遊笑覽卷三目錄

書畫

至草七

五九四九番

明治十三年購求



葦子歌繪

花の花虫

つのも虫

木こりの字

文字魚虫の躰

梅竹梅

糊付

書

封筒

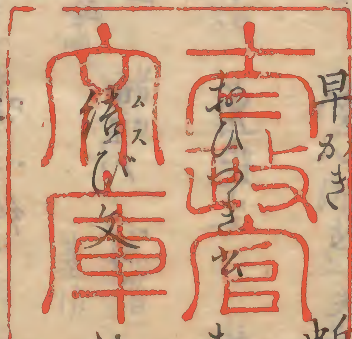
紙

只上虫

筆

消息長短

游女の文封



ゆり筆

早

蚯蚓

虫

虫

虫

虫

虫

虫

虫

虫

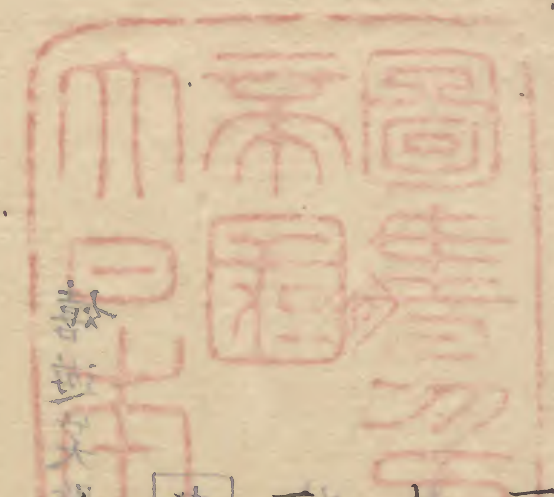
虫

虫

虫

虫





文字絵 本筆 米粒の書画 鞘画

寫真鏡 白繪シラエ 作繪 泥画

霞 源氏雲 牧童図カウラノ図

鳥羽繪榎木翼

墨あぐり 男オトコ女メウメ 笑ウツク 枕画

古陵石人 角先生 大津繪 化物画 浮世画名

一畫付より合画 墨あぐり 草紙草紙 沿筆

八文字屋草子 役者評判記 其碩が傳

水を以て字出 燒画あぶり出し 石筆

詩歌 繪解比丘尼 水上書画

掩韻 厚あつんはき 文字合 歌字尽

本朝詩賦の始 連句 漢和 狂詩 假名の詩

連歌 花本 賭物 点者 紹巴宗匠あぐり 古今傳授

俳諧 式法 沿筆 談林 桃青う文 付合 其角の玩

古式 点法 正凡躰 座あを食 天狗をいい 前句付

五色墨 月評 狂歌 俳諧歌 今世の狂歌味 俳名表徳

柔乃句 尻取 北は附 文字くりり 後の付

九師の筆

九師の筆

九師の筆



謎

字謎  
ふ不付

判物

招牌符

衣袋のめくり  
ねんぢ判物

譯字

迴文

疊字連環

禱、文字讀

点取賣物

曆日大小

辨器

香牌

符林

符林

符林

東、白も

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

嬉遊笑覽卷三

書畫

多筆

早

蛭

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...











あまのさきさき... 河内抄

ついでにたて文之... 河内抄

紀乾書のやう... 花多餘情子嫁娶

てしむまじびて... 花多餘情子嫁娶

あとのめくけ... 花多餘情子嫁娶

ゆふありこれ... 北山抄

あまのさきさき... 北山抄

あまのさきさき... 北山抄

あまのさきさき... 北山抄

あまのさきさき... 北山抄

あまのさきさき... 北山抄







明石巻三娘返幸  
チ父ノ入道カ出シ  
チモ宣旨出トイヘリ  
点ルハ仰テ出スルノミ  
ニ非ス他筆ニテ出テ  
シカイヘリ

云て忽ち手筈を聞て、吾も紙四枚取申して何れ書ふべし人書つ  
それを押巻て、魚紙志て立文して上書ふ。魚紙は表裏と  
し、荒玖波集のうらみ紙四枚はすねと礼紙と魚紙あり。これ、流のおりけ玉  
路あり、糞まこと出ゆ 仙階津系 千句 志る人よを傳し、くみあり  
出ぬる文よりし、あやや、今俗は書る物の端をらひしとこと  
消息あやぬよのよひ、源氏の物語は宣旨をあるあや  
今いふ作を志し、遊学往來の仰書、硯入水向法前摺墨深筆後  
可中案内、まじらむあひ文と、後宮名目云うあむあひぶとや  
侍る人のあむまを、まじらぬ主君の中、まじらせられ侍るよ。

今通用書物起  
一筆は皆ふはトカク  
寛永にヨリ始ルト  
見ヘタリ女子ノ一筆  
ト出ス、ハ古キ文  
タマコレアリト  
東海談翁草等ニ  
云リ

是は前よつめ、ひて業し文あや、そのまじらつる文  
なり、うちまじらての筆人、まじらぬものを、用捨を、まじら  
と、まじらぬ、まじらぬ、業し文、まじらぬ、まじらぬ、まじらぬ、  
物活は、まじらぬ、まじらぬ、まじらぬ、まじらぬ、まじらぬ、  
実録、宣命の中、口状と有、今世は口状を口上と出、その活書、  
几帳を几丁本性をおよ、まじらぬ、まじらぬ、まじらぬ、  
ハ換也以文書換、口辞也、これ口上書、  
天香楼偶得、爰書、爰換也以文書代換、其  
口詞若今録、囚口供是也、とあれ、今世、口上  
漢上、文ヲ筆ト云コトヲ論シテ、陝  
餘叢考、二十志、雕龍曰、今俗常言  
無韻者筆也、有韻者文也、是六朝人以韻語為文、散行為筆耳、可見文字筆  
自是二種トイヘリ、サレトコニテ、ハ書ニマレ、筆ニテカ、モノ故筆トハイフナリ

醒睡笑 文の、  
といふ條











口云乎或語教下村書ナカラ古ト物ノ○雅談集ニ管根山中華河宿ニテ或旅人実語教ヲ誦シテ山高故不貴飯大ナラシ以爲貴ト云云古家主下筆不之不入肥ルカ故不貴以賃クダ爲貴ト互ニ入興ニタリト云ヘリ

○東瀛子書翰雜筆ニ云往來ハ札記ノ礼尚往來ト云ヨリ出タ名止故ニ庭訓凡月トハ狀毎ニ反報ヤリテ礼ヲ備ヘタリ云々商賈往來ト云モハ元禄ノ頃京師ノ訓蒙師堀

流水軒ト云人ノ著作トカヤ唯一帖ノ物往來ト云ニカニヤ云々ニ端物取物ト云フキヲ麻物ト誤リ其書流氷軒自筆ヲ書林大野木氏開板セシリ津々浦々流氷市滿

海岳名言上問本朝以書名世者凡數人海岳各以其人對曰云々黃庭堅描字蘄軾畫字上復問卿書如何對曰臣書刷字云々ハ筆法

を海岳各以其人對曰云々黃庭堅描字蘄軾畫字上復問卿書如何對曰臣書刷字云々ハ筆法

を海岳各以其人對曰云々黃庭堅描字蘄軾畫字上復問卿書如何對曰臣書刷字云々ハ筆法

を海岳各以其人對曰云々黃庭堅描字蘄軾畫字上復問卿書如何對曰臣書刷字云々ハ筆法

を海岳各以其人對曰云々黃庭堅描字蘄軾畫字上復問卿書如何對曰臣書刷字云々ハ筆法

を海岳各以其人對曰云々黃庭堅描字蘄軾畫字上復問卿書如何對曰臣書刷字云々ハ筆法

を海岳各以其人對曰云々黃庭堅描字蘄軾畫字上復問卿書如何對曰臣書刷字云々ハ筆法

を海岳各以其人對曰云々黃庭堅描字蘄軾畫字上復問卿書如何對曰臣書刷字云々ハ筆法

を海岳各以其人對曰云々黃庭堅描字蘄軾畫字上復問卿書如何對曰臣書刷字云々ハ筆法

を海岳各以其人對曰云々黃庭堅描字蘄軾畫字上復問卿書如何對曰臣書刷字云々ハ筆法

を海岳各以其人對曰云々黃庭堅描字蘄軾畫字上復問卿書如何對曰臣書刷字云々ハ筆法

を海岳各以其人對曰云々黃庭堅描字蘄軾畫字上復問卿書如何對曰臣書刷字云々ハ筆法

を海岳各以其人對曰云々黃庭堅描字蘄軾畫字上復問卿書如何對曰臣書刷字云々ハ筆法

を海岳各以其人對曰云々黃庭堅描字蘄軾畫字上復問卿書如何對曰臣書刷字云々ハ筆法

を海岳各以其人對曰云々黃庭堅描字蘄軾畫字上復問卿書如何對曰臣書刷字云々ハ筆法

を海岳各以其人對曰云々黃庭堅描字蘄軾畫字上復問卿書如何對曰臣書刷字云々ハ筆法

を海岳各以其人對曰云々黃庭堅描字蘄軾畫字上復問卿書如何對曰臣書刷字云々ハ筆法

を海岳各以其人對曰云々黃庭堅描字蘄軾畫字上復問卿書如何對曰臣書刷字云々ハ筆法

を海岳各以其人對曰云々黃庭堅描字蘄軾畫字上復問卿書如何對曰臣書刷字云々ハ筆法

高野日記ト大師乃此山の景を書と後ハ法性院の坊あり

高野日記ト大師乃此山の景を書と後ハ法性院の坊あり

高野日記ト大師乃此山の景を書と後ハ法性院の坊あり

高野日記ト大師乃此山の景を書と後ハ法性院の坊あり

高野日記ト大師乃此山の景を書と後ハ法性院の坊あり

高野日記ト大師乃此山の景を書と後ハ法性院の坊あり

高野日記ト大師乃此山の景を書と後ハ法性院の坊あり

高野日記ト大師乃此山の景を書と後ハ法性院の坊あり

高野日記ト大師乃此山の景を書と後ハ法性院の坊あり

高野日記ト大師乃此山の景を書と後ハ法性院の坊あり

高野日記ト大師乃此山の景を書と後ハ法性院の坊あり

高野日記ト大師乃此山の景を書と後ハ法性院の坊あり

高野日記ト大師乃此山の景を書と後ハ法性院の坊あり

高野日記ト大師乃此山の景を書と後ハ法性院の坊あり

高野日記ト大師乃此山の景を書と後ハ法性院の坊あり

高野日記ト大師乃此山の景を書と後ハ法性院の坊あり

高野日記ト大師乃此山の景を書と後ハ法性院の坊あり

高野日記ト大師乃此山の景を書と後ハ法性院の坊あり

高野日記ト大師乃此山の景を書と後ハ法性院の坊あり

高野日記ト大師乃此山の景を書と後ハ法性院の坊あり

高野日記ト大師乃此山の景を書と後ハ法性院の坊あり

高野日記ト大師乃此山の景を書と後ハ法性院の坊あり

高野日記ト大師乃此山の景を書と後ハ法性院の坊あり

高野日記ト大師乃此山の景を書と後ハ法性院の坊あり

高野日記ト大師乃此山の景を書と後ハ法性院の坊あり

高野日記ト大師乃此山の景を書と後ハ法性院の坊あり

高野日記ト大師乃此山の景を書と後ハ法性院の坊あり

高野日記ト大師乃此山の景を書と後ハ法性院の坊あり

高野日記ト大師乃此山の景を書と後ハ法性院の坊あり



曰飛草其法皆生於飛白亦自成一家として散筆ハ毛の乱を以て  
みても凡そといふは是れなりと飛白の法とて○雙鉤字を俗に龍字  
と云ふ二重文字を以て明人の法を飛白といひて石墨鑄華と云ふ  
又張斐といふ者清を避て日本を以て海を以て長海と云ふし加て  
舜水がその法を以てのりや異國人を止むる事禁制ありし  
時ありて空しく帰國となり此者安藤省菴と贈答したる文を  
省菴霞池手簡題跋として板本あり霞池ハ張斐が號あり其内ハ  
飛白書をかきて少菴ハ示す文あり其飛白の模本を関原若の  
清に以てて事行り行草の二重文字を以てん事行る物ありと

古書飛白昇仙太子碑別天書題額ハ薛稷ハ飛白書なりこれハ細く  
節々刷毛のやうなり又名臣言行録集粹の内ハ飛白を飛帛と云ふ本邦の  
俗に書画ハさうり物の紋にハ何れも松竹梅を用はる漢に  
あつ用はる事あり金鰲退食記ハ明世宗晩年ハ是靜常居西内  
と云條ハ大臣賜賚ハ物ニある中ハ松竹梅並帶とあり又陶説  
乃後器の内ハ嘉靖密松竹梅酒尊又景岳條ハ松竹梅益云々  
予ハ所藏林良九画ハ松竹梅横幅あり松卷末草本ノ條ハいへり  
葦草も天徳の款合ノ記拾遺和氣集ありと云ハ款條ハ後撰集あり  
松卷集筆あり源氏物語抄あり松あり松條を以ていへり















者有り江南録の史應用善寫細字微如毛髮常於一錢内寫仁家  
心經及於麻紙上寫一經書又於一粒麻上書國恭民安四字人欲讀之  
須澄目良久乃辨凡書時於闇室中向陽獨閉一窗如錢大因映其明  
方能寫之咸平五年為吉州永新令後以貪欲受賂敗謝肇制との  
とをいひて此雖絶世之技亦近於棘猴矣以余所見有便面上書西  
廂雜劇一部者余亦能之但目力勝人耳不閑書法也といふ虫めを  
用ひて何の能きものも筠廊偶筆に昔王夢澤稱施生西於  
方寸之楮作小楷數千點畫不淆於粒麻上宛博書之成五言詩一絶人甚  
奇之是未知有術也 これを澤元體の瓊浦偶筆の  
自己の文のゆく書くは何事ぞと有述より西洋の銅

板の法に倣ひて顕微鏡にあらずんば見るべからざる神の書画を鏤  
刻を精巧と云く彼ら方らば麻粒の細字奇と云ふは  
○五雅類に高麗日本畫皆精絶不類中国余從蕃舶購得倭畫枚  
幅多畫人物形狀醜恠如夜叉然長短大小不一亦不知其何名也西無皴  
法但以筆細畫索廻環繞細如毫髮四周皆畫字不可識といふは  
ありあつたもの物ありは西洋紅夷の画を○油繪  
西洋の画法めく人多くめくは畫画に異ありは寫より長  
油粕よりけらぬ色に油に獅孔をきりけらぬ油に  
画より光澤をいふは俗に浮絵と稱するは西洋の画法に



唐山より景を遠視畫といふ彼カニトとめてカニトと今カニトも西洋の如く倣ふ

大清耕織図ふと浅初め磁器漆付山水遠景の法を用ふ

又磁器の油絵をもつる又近ごろべんごの若く多く  
新法ありこれ西洋の彩色の具あり 鞘繪といふものあり和蘭が

漆の物あり池北偶談に西洋所製玻璃等器多奇巧曾見其所

畫人物視之初不辨頭目手足以鏡照之即眉目宛然姣好鏡銳而長如

卓筆之形又画樓臺宮室張図壁上從十步外視之重門洞間層級可

数潭々如王宮第宅迫視之但縱横數十百畫如碁これ碁あり

めて刀劍の鞘よう法とてカニトと今も物也す西の法様は偏々  
かゝるをほまじ長き物

かゝる後あり浮絵の寝惚文集詠鞘繪二人頭似鉢匏瓜北月曲未申

着物料笑此一枚京土産皆々映鞘更相誇明和四年此持て  
めしかりしもの 今

寫真の鏡あり物理小識に置玻璃鏡于暗室窓版則物形小縮透

入凡上之紙可細描也寫真甚肖いふもあり

一は條を末よアルシ 玳瑁画指の爪めて西をくくを玳瑁画といふ香祖筆記曰有玉秋山者

工為玳瑁画凡人物樓臺山水花木皆于紙上用指甲及細針拏出設色

濃淡布境淺深法古各西按拏當作玳音築字書以手拏手物也

藤貞幹云近年玳瑁画かゝる俗に指画といふ亀玉は川祖をかり

といふり亀玉を近ごろの人黒川安定といふ者玳瑁字玉篇に記奉

切抱也或作拏字彙拏也とて同筆記云近閩中

金齋退食記明世宗直宿大臣賜物中葫芦景画銀豆銀人云















今のとばそ、の、春トがき出、たる、西、繪本、子、體、  
こきを、羽、  
阿闍梨の、今、  
生ひて、  
羽、  
落髪、  
こ、  
人、  
今、  
終、

誦を、  
志、  
一、  
こ、  
一、  
こ、  
又、  
そ、  
そ、  
判、  
長、  
勝、

勝、















○枕西雜誌四卷厨  
貯牙鶴石琢横陳像  
凡十餘事秘戲冊卷大  
小亦十餘事コレソウケ  
又ラウ石ナトニテホリタル  
枕人形ト枕ガウニナリ

按てよま好古目錄は欽明帝御陵の邊の田間より出づる石人四軀の  
雖を載せり了り三面一四面一三面一と二面後は土人等をして陸上より列ぬ  
俗呼て七福人とい稱稱固より我あし亦を發掘何の意ありと  
淋淋と云古昔石工の裁きも鑿るもあつむと或ハ物々むと  
以てりてあつむを裸布みして春画のこゝし三面四面と云る  
ものも交接の跡あつむを是の墓中此春画の類めて殉代  
なる物々壓勝の具々たる自徳の油指を至坂山と云ふれ  
むりかゝる意の文いきて縁する具をくむる更豈有此理書名辞好  
好先生啓望南飛賦あり好先生望南飛賦のあつむの故を不承  
人ノ角先生トシテ明和二年春真能うらん

百花唐露丸の句長句 枕草紙、快史ノ西ヲ春宮トセ云  
湯ツケ許リテ名ジウシは具ヲ至ヘシ 春画の古きこと、用修藝林伐山徐陵与周弘讓書云優遊俯  
仰極素女之經文并降盈虛尽汗皇之圖勢藝林学山は即仁室云漢成

西村踞姐已干屏此春画所自始也 則味人画苑春宵秘戲圖有自表矣張平子  
樂府素女为我 师天老教肝皇柳又古矣 ○大津繪の傳くところ岩依又素

画き始めのころをいふに孫めくく又平久古あくと落款する  
画ありたるはねいして画法を信貴山玉藏院に明兆の地  
花井の繪を繪表をみして十戒をみし海北忠忠  
藤原某の河津の今の大津絵をいふ西法は清水寺の類  
に於て怪多を射る圖を海北忠忠の筆に寛永十二年乙亥  
六月吉の繪に於ては外に画者名をいふ奴の男番叔を



























画乃... 古き物... 稀... 又繪... 女見... たり... 画... かくや娘... 若... 久...

繪巻物... 他... 十二... 亦用... 源氏梅... とき... 集... 所... 是...

四年







萌草の表紙を付る居流の終本を出し是書本の始之後又  
黄表紙とありたるは表紙をいふを言ふなり一赤き表紙の本  
とありしより何れをいふと赤紙と呼ぶる表紙の標書<sup>ウツカキ</sup>を印摺<sup>ウツ</sup>り  
し双紙の終り居流を去て尚世綿終摺の画とありしは寛曆十年  
庚辰乃春油所丸小山本九巻より家の双紙丈阿我作の本を始とて  
是より赤紙のさうし野草とありしを印摺とありしは綿終摺のさ  
風をさうし安永六年丙申より是より終り表紙の題号若  
風をさうし印摺とありしは是より例年表紙は野草と  
出流此終草の終成紙乃表紙めて二冊の毎春終紙の子供の

是より例年表紙は野草と  
出流此終草の終成紙乃表紙めて

終り西工と依信ありし詞書を其積自笑号と又西工と依信  
句根等を書きしありし小川氏昔出み京郊八文字屋浮世双紙  
五冊の役者評判記を其積自笑といふ者述化して毎年四月  
二冊定式めて大傳馬町鎌形屋孫多富と云終草子関屋賣出をり五  
冊ののめを各文も多し評判記ハ京大坂江戸各宿妓役者の形をせ  
相方の善悪乃評之自笑を相云十一月朔日より初巻と云相之省略  
めくありしは六日ひりりたりと云相言ありは評判記を志し梓  
行々て三月二日お江丸めて表紙も減し速なる事終り入る仕業  
延喜寛延の行々ありしは人終りしは五冊のハ

女  
一、昔日本、二、日  
三、日、日、日  
四、日、日、日  
五、日、日、日  
六、日、日、日  
七、日、日、日  
八、日、日、日  
九、日、日、日  
十、日、日、日  
十一、日、日、日  
十二、日、日、日  
十三、日、日、日  
十四、日、日、日  
十五、日、日、日  
十六、日、日、日  
十七、日、日、日  
十八、日、日、日  
十九、日、日、日  
二十、日、日、日



其蹟自笑ホウ草子ハ  
井原西雀ヲ本トスソ  
頃京ニ西村市市在ル  
ト云者アリシカドソレミ  
ヲ專ラニセ子ハ人モ知ラ  
サルカ如シ西雀ウセテ七  
八年経テ元禄十四年  
雜波梅園堂ト云者ハ  
俳諧師ナルシ諸藝家  
平記ト云モノヲ作リテ  
西雀ヲ嘲弄セリ其中  
ニ都ニ好色文ノ達人  
西村市市在ル華ヲ振  
ラ西雀ヲ消トイヘルモ  
又學向ニウトケレバソ  
誤リナキニ非ス云々當  
春ヨリ都ニ都ノ錦ト  
イヘル者出来リ云々其  
文殊勝ニ覺ヘ侍ルコト

元禄曾我大和莊子也  
ノ作者ナリ又大坂ニハ  
西沢九十九ノ女大名丹前  
能登前記紀ホの他  
者ナリオモフニ西村市  
市在ルハ名ヲ記シ作  
モ見ヘ子ト人倫訓蒙  
圖書好色訓蒙圖書  
同筆ニテ彼市在ル  
ニヤ  
ハ文字屋双子ノ後ハ滑  
替ノ草子次方ニ江戸  
作者上チ多クナレリ

寶曆の末より後々梓行あり評判記を京都中へ傳りて今迄出れ  
りとも四月二日より出せ程よく江戸へ來りて存る抄あり江戸  
ぬて江戸役者より此評判記をいしりて奪れり今も堂紙を  
其蹟よく公羽草ハ文字屋自笑浮世双紙の編者ハ江島其蹟  
いしりて世情をのり筆整をさし近世も筆ハ所謂曲三味  
線色三味線突情林短氣も諸の容候抄あり今世の人も是を  
評判記と云ふ抄は浄土の抄ありて近世も又双紙を他事  
抄に評判記の後の南嶺を其蹟を欺くばりて他巧も亦是と  
評判記の蹟を評判記の蹟と云ふ人々も評判記を評判記下つ

筆の四つ一他者あり今も評判記ありて評判記の蹟を  
評判記の蹟を評判記の蹟と云ふ人々も評判記を評判記  
本堂の佛師春日作の大佛あり此寺門前評判記を臺に家々大仏  
評判記の蹟を巨萬の賊と云ふ評判記の蹟を評判記の蹟を  
大佛を建立せり又別の餘屋大佛評判記を評判記の蹟を評判記  
志々今も評判記の蹟を評判記の蹟を評判記の蹟を評判記の蹟を  
いしりて宅をうりて評判記の蹟を評判記の蹟を評判記の蹟を  
評判記の蹟を評判記の蹟を評判記の蹟を評判記の蹟を評判記の蹟を











此紙ののぶあは丘尼初らみゆめおしと血の池をどく  
是は徳経の血  
盆經より

水上書畫 白字 墨流 水を吹て字を吹

水園戯 技暈 焼繪 ぬり出せる石筆

水上書畫をかくる墨流の方あり物類相感志云磨黄芩字

字在紙上以水洗去紙則字畫脫在水面上  
此書藤軾著とあれし書中より  
東坡の筆を収る法をいり後人

黄檗白礬を用ひて字をかくよし  
睽車志より  
ふお物珍あり

李恒といふの巫祝を業とす陳増といふ者の妻李恒をよびて巫事をあそむむ  
も洗の水は白紙を濡めて祝をその紙のまゝをうりて女を捕へて由ゆらぬ  
所れりれ妻にこれを懼うて思ひて夫に陳増は昔は陳増明也妻李恒を  
しめ洗の水は紙を濡めておまの男も一人の男を遊せてゆくをうり

男の名をききしを李恒といふをききしを李妻恒物をかくて迹跡ありと云ふは蓋以白  
雙面紙上洗水中水同色といふ古き前付といふもいふ所の文よりす耳盟

又一法少豆粉一丸黄柏五ト明礬下これを麻切に包み水よく湿し紙

よ清しきまを文字よを画め書き水の内よ浮め細き糸串

にて紙を穿て底よ濡めまは墨を吹て修よ水よく浮む

玉を清しきまを文字よを画め書き水の内よ浮め細き糸串

かたしは紙外ちあかりはは紙をたたくて  
春庭の中此通紙  
といふあり

天竺紙糸よめ墨を墨流紙に藤貞幹云墨流し後世

種紙を巧をなすなり如きも古昔あしは墨を紙用の一條の墨烟

風を流して紙をぬりて四百年津のりよ玉雅経のりよをいへり











池北偶談卷十六武  
凡子雲南之武定人  
名恬或言其先軍衛  
官也嘗行乞市中或  
寄宿僧寺狀若清狂  
不慧持有巧思能於竹  
箸上燒方寸木炭畫  
山水人物甚闊鳥獸  
林木曲尽其妙嘗畫  
凌烟閣功臣瀛州十八  
學士鬚眉意態衣  
褶履履細如絲粟而  
一々生動或以酒延致之  
以著敬布其側醉瓶  
取畫運斤成凡藩王  
督撫藩集吏更邀致  
即逃匿山谷下見也其  
箸更直白金教皇官  
滇南者遠觀京師用  
充方物亦奇柱也凡子  
醉後或歌或笑或說  
論詰有奇解年六十  
餘卒盧氏雜記云  
故德州王便君倚有筆

紙を抄し又唐紙を用ゝもの有り至古の紙を異邦の製  
と同じ焼画火炭画と曠園雜記より之をいへり按よ吳陳  
琰曠園雜志下火炭作画武恬安寧州人能以火炭画竹絶精巧不可  
多得其述異記に永寧州通大道處有上岡の側一小茅菴中  
一道人以賣馬鞭竹快為業傍置一爐取炭焯鞭快即成人物山水草  
技倭銀更細所獲錢即修路及橋云云此も焼繪あり竹快と  
竹筋あり倭銀といふも紅毛の根淺るもや源平盛衰記に  
三浦義盛矢よ三浦小太郎義盛と焼繪ありりるも焼印  
あり焼繪ハ小き鑊を他りたし焼て紙を繪をぬく漫

一管約一寸許管兩頭  
各出半寸以來中間刺  
從軍行一幅人馬毛髮  
屋木亭臺遠水無不  
精絕每一事刺從軍  
行二句云用鼠牙刺之  
故雀即中挺有王氏筆  
管記此其類鳥  
コ筆管彫刺予カ  
知ル者コレヲ善ヨキセル  
ノラウニ三十六歌仙秋カ  
夕書画共ニ鮮明ナリ其  
外何ニテモ人ノ常ニ應ジ  
テホテサレナシコレハ  
衣服ヲ縫フ針ヲ用ヒテ  
製レリサマ奇トスルニ  
足ラス

好し仕せり紙を奉るの厚紙下り生紙も  
又炭火の焼く所の白灰をとりて硯水を用ひて墨を  
紙搥のさきよ火を付て出さる如く火をうつをば大に墨を  
彫る如くもあつたり近ごろの桐の葉あつたり給う  
物理小識卷八礬書白字とありく皂礬水写字入五倍子水中盪  
寫紙烘以火草麻子油寫撒紙灰或杏仁灰俱可見又曰白芨研汁入礬  
灰書黃竹紙俱如丹これ今小兒の弄ぶあり出たりり  
あり同書に寫不上者有法とて薑汁研墨書布絹不湮石工以  
大蒜粘石市鍋者以薤菹書鍋肥皂水磨墨書油紙西燭とあり











そと何の字かある我知らざるものありしや

文字合をいふもの何れ何人の他なること我に其序は抑文

や合を篇律と名づるありしもの古き昔をよと好む人の整ひ

のりともむけりしりしはしるべきを律と名づるもの形もぬ

然るを事あるも法を納むの文よりさひつき見達の大和唐古の古

物もさひひのものをさしありけりやとさしめしことしはれ

文字法今も同をいふて自知りしことと雀雀杆杆等乃まはれ

りきたしむへみを知りしこと我耻て友とちのものをいふは人日

サカカバ 昔と讀むるもの形も思ひ侍りしよ月篇出されハ

かその人のちりやく腑に讀て取らるるおしき事保十年とを

凡例よ合せたり読むもの如く篇冠ハ中よ重ぬべき造りハ

とくそを並ゆへ初めは魚篇出まは魚篇の文字をとりひく

よ取法しきこと出さるる合をいふ字を拾ふこと又寺といふ字

を持ておしきことしるるものとし多く取らるるを律を造り

毎よそ造るはく篇四五字片は我和をいへりてさへやいしむ

と何り思ふよ小野篁の読字とていふ物の形なり又は神め

古本との形は瑣玉集といふ古写本なり序曰愚昧沙門四一

念佛之暇徒然之餘開一字篇作以合本字字終成三言云、康應元

凡例よ合せたり読むもの如く篇冠ハ中よ重ぬべき造りハ  
とくそを並ゆへ初めは魚篇出まは魚篇の文字をとりひく  
よ取法しきこと出さるる合をいふ字を拾ふこと又寺といふ字  
を持ておしきことしるるものとし多く取らるるを律を造り  
毎よそ造るはく篇四五字片は我和をいへりてさへやいしむ  
と何り思ふよ小野篁の読字とていふ物の形なり又は神め  
古本との形は瑣玉集といふ古写本なり序曰愚昧沙門四一  
念佛之暇徒然之餘開一字篇作以合本字字終成三言云、康應元



蒙求ナリヤウニ人ノ  
 オホキ易キヤウニ作  
 レルヲ畧頌ト云  
 又詠誦ト云モ 詠吟  
 スヘキヤウニ作レルナリ  
 源平盛衰記卷ニテ  
 兼隆ヲ追善ノ紙  
 ノ詠誦アリ法華經  
 開八卷ニ成仏身云  
 法ノ化終ニヒラクルハマキ  
 ニハ心佛ノ身ト成スル  
 トヨムト云ヘリ  
 ○漢ナリ人ノ童見ノ小学ニ  
 属對トテ一句ヲ出ニテレ  
 ニ對句ヲ作ラシム文辭声  
 律ニ熟習スル処ナリサレト  
 北人ハ其事ナド見ヘリ  
 日知録ニ今南人教小学  
 先令属對猶是唐宋以  
 來相傳旧法北人全不為  
 此故求其習此偶調平  
 仄者千室之邑幾無一  
 二人ト云ヘリ

年上旬信州小管山眠居比丘四一謹記之  
 月明地土也亦木禘日者暑月良朗弗人佛慈慈  
 篇継の料もあへて  
 是古人王安石字詵を誦して波水の皮をひりしめをとし韻  
 塞の中務集なる山の志あり  
 人々の心

今昔物語は天智天皇の御代は漢子存あり  
 智リ者才賢  
 文の道をは極めて好む詩賦を此頃の時  
 此國は始りて本朝一人一首日本紀曰

詩賦之興自大津始也紀淑望古今和歌集序曰大津皇子始作詩賦何  
 不言大友乎想夫丑申之亂大友天命不遂而太弟得志即是天武帝也  
 舍人親王者天武子也故撰日本紀時諱而不言之乎抑亦大友子孫悼而  
 不傳之乎大友久蒙叛逆之冤其詩不傳于世是以淑望亦未見乎微懷  
 風藻則大友之寔乎といふ詩賦の始を統紀より  
 この盛りの終りて後世聯句といふ又聯詩の  
 玉海曰文治三年二月廿七日御書頒作文先例連句有過五韻  
 而天永以往多有二十餘韻可追舊例之由豫以仰宗隆仍連句有  
 二十韻也五山の僧徒の伎も長し東山如月







次聯云一蛙跳擲而忽翻其白肚似出字一蛎死于砌下如紫之字也  
 ありありの席上腐談或謂蛙形象出蛎形象之此皆魚骨  
 象乙之意也云云の語をとりて他はなれおと高教曹の詩  
 桃生毛彈子瓠長棒槌兒牆歌壁亞腹河凍水生皮あとの類多し  
 こゝめしこゝめし似る連句多し百物流しはあはれはあはれ  
 連句をやりし時名人の句とて人の活しを雲戸過雲戸水魚  
 達水魚麻々鳴明鹿鶉々睡暮鶉吐自口邊出睡令目下垂油因油断断  
 火以火吹吹らる寛永中の冊子なり又東見記は好對多く裁を  
 その内雄長老の句。白川隣黒谷。紫野。延丹波。八坂五重塔。三條六角堂。小僧參北野。大仏在  
 南都。櫻東山地主。梅北野天神。かゝる句あり

和語抄よ宗祇新菟玖波を撰し櫻井永仙の連歌不入これに依  
 て為書をまろ遙見菘波錢便入不論上手下手用却あはれ  
 乃なり子ぬはくく山和なれなれ連者あまも永仙櫻井  
 基輔なるも漢和連句のり古流は集始て出和漢句  
 挙句漢句漢和挙句和句まも無言抄よるなり  
 枕雙紙の蘭省花時錦帳下と書てまもいふもや河りし  
 云々まなを流尋ねんと書付しといふ事何の漢和連句か  
 似しことし漢和の連句を五言より和句十七文字より長短ひと  
 しかり故に雅遊醉狂集の漢句も五言のり限るなり



抄抄の懐紙のきのの自よしたる神と以之の二巡乃時を和句長き  
漢句五言をてを流り合むるは七言をてお交ては何と  
里村昌純の尋ねられは答は愚拙しきるは捨てるは是も然し  
漢句此式を連歌師乃定むべきはあはれ何とそ友位を  
文字何の方此抄し初められはあつて世に形られあむし  
少るなり近以甲良道二といふ隠者あり里村氏一家に連歌  
乃事能きまう詩は石川大山の學ひて文字拙くは井上友貞と  
いふ俳諧師と狂吟の和漢漢和千句の追加二百韻をゆかり  
その他むしよりしきけりものよりしきあし程連ていふた野都

なるものなればあはれは流るるを初めは耐を真の句はこれ  
むむ外に只俳言を用ひて和句のちひなりは昌純の詞は未だ多  
是五百句は流るるは初めは流るるは初めは流るるは初めは流るる  
半は流るるの及ぶるは七言の句は初めは流るるは初めは流るる  
付るるは初めは流るるは初めは流るるは初めは流るるは初めは流るる  
町言歌をて吉系のことばを根を擬して他を流るるは初めは流るる  
三益様娘の野郎を流るるは初めは流るるは初めは流るるは初めは流るる  
詩とて一巻を流るるは初めは流るるは初めは流るるは初めは流るる  
は初めは流るるは初めは流るるは初めは流るるは初めは流るるは初めは流るる

其の...  
...  
...















歌点者ニテラス人ツ  
 昔ヨク定テス程ナレニ  
 カクセニハヤリシニ專マ  
 賭物ナ出ニ勝負セニ  
 コトニ徒ホ草ニ何ア  
 ミタフトヤヤ連テニテ  
 法師物ニ怖テテ小川ニ  
 コロヒ入連テ賭トリテ  
 崩小管ナンドフトコロニ  
 持タルモ水ニ入マツル  
 物カタリアリモト和ホ  
 ノカケ物ニ働ヘルナリ  
 和歌舎賭物ノ事ハ著  
 聞集マタ東鑑等見  
 ヘタリ

改め書加へらる如を新式目追加と号して又其後宗祖法師宗匠  
 みて沙汰をせしむる次第今業といふなり其の一條禪園の山形  
 麻覚為氏は日本の物れ上を唐國へ奉りて我が連家此  
 名にてや人の國を渡りてきておとねをすまはれりてや後を嗣  
 院のはせりては連家の上りて柿本を名けられりて連家  
 には栗本の麻を名つけられりて柿本の老若を異あらん  
 たり此事を傳りて日は時どのお物百は賭物の於て定家ハ四十  
 としたると日記に傳りて定家ハ歌ひては歌業は法くんとて  
 ありては夕連家のをてせりては承りては暖哉院

乃ほ代々を弁内侍少将内侍をといひて女房連家原をいふ  
 志すといふも傳りてこの地ト下のいふ河をがとてなまといふ  
 無念ありては花本の言葉をいふはたはたはたの西ふ  
 さ白とていふは侍る子細ありてはさうは歌の毒とて一向をて  
 らるはたのいふ昔もたはたのいふ事よは詩化人の連句をいふ  
 いふとてあし何とて歌の連歌を忌後せん初めはたそ  
 物心もたはたの色も心も定りて人の連家よやれりてや  
 あらざる見事集は宗祖都の舎心をあつては後禪初め  
 句の世もはたはたの麻ははたはたの連家よ











今抄よりよしの連を初撰りて其の般若塔  
あり人いひふくしうとては名を法僧とせり

を建てるたうしが塔風を換へて塔をいふりり  
つりつり文安三

丙丑年成就とてしつり法を鐘も年号河  
しう苗年号七十九甲

乃八月六日未刻大風吹て百六十九年  
昌川の石物ありし塔も倒也

塔の事始とて言ふは用あり  
可笑記西保元年卷二上より應元車

とていふるもれども是あつた  
そのいふれは前道めを

公家のめんくありしとて詩作  
五山の麓にありし連を

あつ昌琢玄仲の家師あり師  
不逞あつて百人九人まで

あ連を詩作あつたふもあつ  
侍をいふ但その用ありけり

それくを影くすは合をむ  
やあつてんりて代名ありん

増しあをばさつて河の但  
又灯臺りてしといへるの

よのつづきの東の侍は  
仙乃儒乃教連を詩作を

あぬあつて百人の内  
七十八人は師をいふ

あはむがといふ多の  
てしきあつてんりて

付向たり教林雅話  
銀巴法橋をいふ千向の有

と九と二人あつて  
いふしよしよし連を一人

とわたりしとていふ  
はつとていふは秋の山

と古人の向ふは  
あつたあつていふ名



















寛文二年三月  
宗因の事  
宗因の事  
宗因の事

西山宗因の事  
宗因の事

徳元寛永十八年  
宗因の事

宗因の事  
宗因の事

寛文二年  
宗因の事

宗因の事  
宗因の事

宗因の事  
宗因の事

宗因の事  
宗因の事

宗因の事  
宗因の事

宗因の事  
宗因の事

宗因の事  
宗因の事

宗因の事  
宗因の事

宗因の事  
宗因の事

宗因の事  
宗因の事

宗因の事  
宗因の事

宗因の事  
宗因の事

宗因の事  
宗因の事

宗因の事  
宗因の事

宗因の事  
宗因の事

宗因の事  
宗因の事



何れし哉宗因出くや古凡を愛し諸林風を起しそれり  
文字解り或漢句乃やうめて怪調あると改しつゝこみ改り  
概を凡を改りて三風佛とあそ凡を物志はくは時必く  
我の心ひひに桃青う桃後の大方の答曲水みくえりや文よ  
風推の道第方々世上二等におんく点々正位をそし後  
を氣は道を見せしう走りて若あり後等風推のうち乃  
う後とてものみ似んは乃を忘る乃妻子の信をそしし店  
今第を修りしんをむくをむく又そりあそ  
して目も三層を世を修り人あひそんめを志しと日故二毫

三毫点取掃る若とがとくは居る若も若のいそいそ一  
をそととそりうを修るあかの問はうまをりてし事修り  
そととそりうを修るあかの問はうまをりてし事修り  
そととそりうを修るあかの問はうまをりてし事修り  
料理を潤酒を飽きくくくを修るあかの問はうまをり  
むとそとそりうを修るあかの問はうまをりてし事修り  
さめ河あうちおそそを修るあかの問はうまをりてし事  
逆ふ定家の骨をさぐり西行の節をたぐり樂天の腸を洗ひ  
杜子の方すよ入やうそりうを修るあかの問はうまをり  
よのそとそりうを修るあかの問はうまをりてし事修り







付合まかぬことひき其角が錦繡は利休の茶湯に  
々新古の目まゝ商人のそつれを好むのたてつけ  
さう神妙のけしきよく用ひきと用ひきとのまじり  
居しとていふこと成りて流落もそのけしきを  
あり流落もその無かれはて席より交りて是れ長き丸珠  
れど点え何れも目利をいふことおきあるまじくや打  
むつりおまゝ席にさうりておけしきよく用ひきと  
無点の句ありとも是れ用ひき無点の心をいふ句  
そめりてし人のお句をいひおはたとせんまじり  
ていふこと

むすぶきと用ひき用ひきのまじり新古のまじり  
さう自然の風流ありて是れ幽玄の一句いふ  
ぬるまじりといふは是れおけしきよく用ひきと  
とていふこと新古のまじりて古き此志をいひ  
あかけを揚ぎたる歌とおりのまじり食指をいふ  
様は付合ひきとてそのまじりて初め此形をい  
とよみまじりて此形をいふこと是れ長きと云  
惟中と云流落あり人の長きをいふこと  
句のけしき面白きとていふこと



















てこの志をきくやうなりきりてはあきめいとていふも程と  
世に流波原をいひては座敷を食とてこれをも連舟原を  
いひては林蔭活の銀巴の事をしていふ古今の近侍殿より  
は傳あり称名院原をいひては食の害ありとてはめをいひ  
ありはてはめ○類柑子類乃鳴の條よりつを昔とてあつけあり  
編集山林湖春の事をもいふを句乃首中をいひてはめを  
いひてはめ今も二昔の事とていひてはめをいひてはめを  
美の事よりいひてはめをいひてはめをいひてはめを  
泯江をいひてはめをいひてはめをいひてはめを

舟よ積りたるの諸君をいひてはめをいひてはめをいひてはめを  
源氏物語の事とていひてはめをいひてはめをいひてはめを  
あり物をいひてはめをいひてはめをいひてはめをいひてはめを  
茶の事とていひてはめをいひてはめをいひてはめをいひてはめを  
男女下見の事とていひてはめをいひてはめをいひてはめをいひてはめを  
下手ありとていひてはめをいひてはめをいひてはめをいひてはめを  
谷の事とていひてはめをいひてはめをいひてはめをいひてはめを  
掘りて是をいひてはめをいひてはめをいひてはめをいひてはめを  
あり事とていひてはめをいひてはめをいひてはめをいひてはめを







外より其封をさへりて其封のあきる浅薄なり  
合議して其事の始末をさへりて其封のあきる浅薄なり  
本の名をさへりて其封のあきる浅薄なり  
御さしめりて其封のあきる浅薄なり  
不しよ得るなりて其封のあきる浅薄なり  
その敷をさへりて其封のあきる浅薄なり  
附を林をさへりて其封のあきる浅薄なり  
其封のあきる浅薄なり  
信若し津島の能く其封のあきる浅薄なり

治めりて其封のあきる浅薄なり  
其封のあきる浅薄なり  
其封のあきる浅薄なり  
其封のあきる浅薄なり

祐涼の延宝八年はけきしり物きい  
延宝中の事ハ後ハ付しり 太田南畝云く三益附ハ其始ハ其

二通より一通ハ其封のあきる浅薄なり  
其封のあきる浅薄なり  
其封のあきる浅薄なり  
其封のあきる浅薄なり  
其封のあきる浅薄なり  
其封のあきる浅薄なり  
其封のあきる浅薄なり  
其封のあきる浅薄なり  
其封のあきる浅薄なり  
其封のあきる浅薄なり







○片歌

古史記ニ日本武命能煩野ニ到リマセル時思国ノ歌アリマタ歌曰波斯祁夜斯和岐幣能迦多用久毛章多知久母此者片歌也トアリ片歌トハ三句ニシテ大テノ五句六句ノ歌ノ半ニシテ片方ナルガ如クナレハ後ニ旋頭歌ト云解ハリノ句五七七五七マナレハ片歌ハマヤシク其半ナリ建武年中行車如茂臨時祭條ニモロ歌ト云トアリ畧解ニ神乐ノ歌有本未也ト云リ然レハモロウタト云ハカタ歌ニ

對ヘル目ニシテ本未ト具ヘタルヲ云ナリ 抑カタ歌ト名有タルハ、後ノ下ナルヘケレド上ツ代ヨリシテ此体五七タノ三句ヲ半ナル物ニシタリト大ホシクテ此体ナルハ何レモ物ヲ問カケタル答タルナトニシテ古事記書記ナルカキリ未マテ皆ホリシ白持原ノ宮辰ニカツクモイヤサキダテルエツニマカハトアル大に歌ニ句ノおノ始メナルコレ大久米余ノ歌以テ同奉レルコトノ答ナリト猶古史記ハニ季シ

上方人誰ヤラノ隨筆 本後足ト謝燕村カ 幸ヤイヒテ茲村ハ不學ニシテ物知ラスタ、放蕩ニテ家産ヲ破リ能人トナレリ西七綾足ニ及ハスナトイヘリ燕村カ画時好ニカナイテ世ニ賞セラル綾足ハ唐給ニテ俳諧共ニ不遇ニテ用ヒラズ恨ミナルハシ

此夜書肆の常ニ應じ云々

又前句附判者多ク中ニ室曆の

未明和の吟札多露丸川柳等大ニ移ル月次万句合トシテ集

句数凡二万六七千句勝句四百四十五半紙五六枚ノ曆の如ク初字

下刻シテ捲ノ柳枝トシテ草子ハ川柳をのめりトをうき句成

括分て上市トシテ今ニ至る迄お續て出ル文字トモナレハ

又文字附トシテ前句附トシテ出ル文字トモナレハ又明和の初

あり 建武仙片歌を起さむトシテ片歌道のをも同ニ扱

問答東風流等の著述云々トシテ初めハ 享保の末。五色墨

集といふあり五人の仙志云々一集トシテその人ハ依久間

長水 長谷川 孫十郎 其角門人 素丸 長谷川 孫十郎 其角門人 宗瑞 其角門人 蓮之 其角門人 超天 其角門人

其評云々小寺文首トシテ其評云江府の仙遊法を

放埒の句姿トあり 宗匠トシテ其評云若句若

と呼ぶ者多ク世乃為暇人ありテ邪淫の媒トあり

章基の合詞トあり近々依久長水丈これをおんき

邪風を改テ画風体ト帰せむト云々難ク書むト云々

江ノ風を破り行リテ大津路の傍此如ク法体ト云



似れどもいふに、古実の正雅をいひ、あつて、

狂歌

俳諧歌

今世の狂歌原

俳諧歌と古今集より、あつて、和歌の一派なり、後、狂歌、各名抄

よきと、いふ、と、あつて、あつて、奥義抄、狂歌の字、抄、と、いふ

と、いふ、と、いふ、又、是、を、狂、歌、と、いふ、狂、歌、乃、字、面、ハ、白、氏、文、集

北九秋日、与張實、客舒、著作、同遊、龍門、醉中、狂歌、凡、二百、三十八、字、云、

その他、後、狂、歌、の、再、乗、り、て、漫、に、作、る、狂、歌、は、太平、記、の、

み、所、首、あり、是、も、又、狂、歌、と、いふ、之、を、いふ、俳、諧、と、いふ、之、を、いふ、

と、いふ、狂、歌、と、いふ、廣、く、いふ、名、を、いふ、之、を、いふ、狂、歌、と、

いふ、む、は、妨、り、一、元、本、阿、弥、言、葉、の、本、末、狂、歌、の、実、情、の、や、む

と、いふ、狂、歌、と、いふ、世、の、詞、の、雅、俗、を、いふ、ゆ、い、と、あ、あ、と、いふ

より、狂、歌、と、いふ、の、あ、い、い、め、人、釈、門、の、佛、言、を、述、ぶ、乃、を、狂、歌

と、いふ、狂、歌、と、いふ、世、の、心、を、いふ、と、いふ、と、いふ、と、いふ、と、いふ、と、いふ、

あ、い、と、いふ、末、乃、世、の、心、を、いふ、と、いふ、と、いふ、と、いふ、と、いふ、

後、あ、い、と、いふ、と、いふ、狂、歌、と、いふ、と、いふ、と、いふ、と、いふ、と、いふ、

是、又、時、風、の、志、と、いふ、と、いふ、和、里、花、歌、謡、の、自、然、を、いふ、と、いふ、と、いふ、

あ、い、と、いふ、と、いふ、井、蛙、抄、の、六、条、内、府、被、詔、云、後、鳥、羽、院、は

時、材、本、栗、本、と、いふ、と、いふ、柿、本、と、いふ、と、いふ、と、いふ、と、いふ、と、いふ、



和風ハ程分テ表曲  
 效ト心ハ古今表  
 曲集ヲ撰メリコレヲ  
 表曲トスルハヒカトシ  
 書紀古事記表振  
 書紀ニ表曲トアリ某  
 振マタ某效ト云ル  
 コト記中ニタクシニナ  
 後ニ集府ニ呼ル名  
 ナリ古今集大效所  
 ノ效ニ述ビテ水莖フ  
 リ四極山アリ有ルヲ  
 類ニ上代ノ美キ效ヲ  
 乐府ニトシテ管絃  
 ニカケ儻ニ奏シテトモ  
 ナリアリハ形状連止音  
 声ノ長短低昂ノサマ  
 ナリ種々ノサマアル效  
 各々名ヲ付テ某振ト  
 ハ云ヘ其処々ノ風俗ナ  
 リト云説ハ誤リナリ

名付栗本ハ程分ハ此を無心トシテ有心トシテ後本極意  
 和尙以下其時乃秀逸の文人なり無心トシテ光親ノ宗乃々表  
 覚法眼等なり水莖ノ和分下庭を爲たり無心ニ在り  
 之後成々乃和分肝要ニ佛語ト狂歌ト佛語沙弥母をり  
 い〜此指をり〜やん味と〜し〜とありされハ程分  
 ハ佛語亦なり〜中〜の体あり雅あり俗あり  
 あり代々の撰集又家々の集又紀行などの中なる佛語あり  
 体あり〜有り有心無心ハ連分あり有り菟玖波集九卷  
 建長六年五節の法有心無心の連分有り〜  
 夷アリハ效ノ首ニ表ト云テアルヲ取ニ呼ビ又夷ト云言ナキ效ニテモソレト同シ振ノ效ハ二部ニ取メテ夷アリト云シ

辺鄙ノ風ナド云ルハ安ナリソハ夷アリニハ非又某歌某振ニ同シ

後を福ノ事ヲ玉ノ事ヲ流ノ心ヲみけ〜人  
常盤井ノ  
各九歌大長 納を〜  
 流ノ流〜  
 山信海生白菴行風ハため徳元ト養未得等納中〜  
 信海の門人ハ鯛屋貞柳あり油烟斎と號を〜それが集録家  
 卷末ニ程分あり云中ハの程分表向分多〜  
 此の程分又ハ其理〜  
 程分〜  
 あり〜



松永貞徳別して戒ありし能治の門中よりけしとてかく  
制され誓紙をまゝとせしむるや、さ尚其京より風水新  
白玉洞の法を修す雅道碎狂集松永ゆんんを其狂女の所以  
委細は自注ありをれを考るてもあやむれとてそのあしと  
いふい集をうりていふは信其の  
なりあるかといふ事 万葉集の歌の事 山石集云是  
中古常あ田中庄といふ処は高観房といふ山所あり藤原家子藤  
追と云百姓の妻よ忠ひありひるる云々山所然孫の参詣の時うの  
百姓妻を具へて奥州の千福と云 奴より山所下向をこれ  
逃して人か、狂女妻を以て忠とて山所問をいせよ言説坊

千福の河をぞ為屋師のゆはそをりて哀れよとてかく思ひく  
狂のれをいふあゆむ心のゆく方返事をもていふ  
かゝいしそをいふあゆむ返の女房千福の為屋師ありとて  
我をいふいそをいふあゆむ心のゆく方返事をもていふ  
万葉の代あはれいふ集り入るるいふ我をいふあゆむの  
うゝ万葉集あはれいふ世う厚く厚くいふ人あはれいふ唯怪調乃  
そのいふいふのいふあゆむの述せうとて系師は若田鈍永といふ者  
狂女をいふいふあゆむの初漫をいふいふあゆむ安永は流いふ

其の葛西本印といふ  
茶の湯ありて今序  
多くいふは  
揚洲の家号トハナ  
ト下物クラビタリシカコレが為ニコノノ賤ヲ失ヒタリトナシ

揚洲漢に赤良等を和して  
其後あまの出来ぬはあはれいふ  
註州樓馬馬カニク赤良居は我伴とて揚洲ノ許ニ行テ相見セシム初メハ狂女ト











上ルリ行平政馴松  
支耕堂 三好松洛作  
ナリ文耕堂ハ松田  
和吉ニ才ニハ六時  
のふんの上をま  
八丈ヶ崎といひあり  
乃ほ附せやうふ  
トアリ上方ヨリ行ハレ  
ニニヤ

みづかきとてわづらひしやうけりける野老とひひくこれさや山の  
いひ暮嶺やと津の國美田の生糸の若とゆきを園をもむれ  
たのまはまきふまきふまき八時れ果をかたれまきふまきれは次のま  
は問もたれまきふまきふまきふまきふまきふまきふまきふまきふまき  
をうしきり物多きうり悔草にけの勢を只合と云は合を度き  
名めて地は又は合を悔草に保四 年板 あう人焼本をむとふあ  
あをまきふまきふまきふまきふまきふまきふまきふまきふまき  
ふれ暮嶺老とてまきふまきふまきふまきふまきふまきふまきふまき  
我もまきふまきふまきふまきふまきふまきふまきふまきふまき

形り或人云地は高地にた乃に合といふとこといひ又柳亭が  
後まきふまきふまきふまきふまきふまきふまきふまきふまき  
享保八年の頃地附まきふまきふまきふまきふまきふまきふまきふまき  
はのちりといひまきふまきふまきふまきふまきふまきふまきふまき  
二人或人あまも人数ふいあしん影を出し一向を付る一向の  
後を又影まきふまきふまきふまきふまきふまきふまきふまきふまき  
まきふまきふまきふまきふまきふまきふまきふまきふまきふまき  
好 業 此  
地子好 業 此みまきふまきふまきふまきふまきふまきふまきふまきふまき  
紙 源  
臼あり杵あり兎もあり 頸 兎もあり 細長い耳をあきめき







ちかへ翅をうけて玉葉の文字讀みて帰る一金中と和判葉才  
 一五十音のこまかいがあつうをその五位を字母とてよを修り  
 乃に十五位のみけりて呼ぶは皆あつうを乃音をせしむあひ  
 うをを此等の中韻の外をゆせとて近世の文字讀むらうる  
 ちかへ文字をうつけるはあつうをのあつうををめてけりてを習ふ  
 とどり又著聞集の家降卿の家をくつうはの連をけりてよ  
 のをうけりて修むあつうは衣大進將監貞度といふ小ざあひつけ  
 けりてあつうのあつうをけりてあつうをけりてあつうをけりて  
 あつうをけりてあつうをけりてあつうをけりてあつうをけりて

曾舟集よつ子歌トテアルハ初ノ歌ハハテノ句ノコトハチ次ノ句ノハシメノ句ニヨメルヲ云リ但ニ  
 ハシメノ歌ノ末ニセナガ袖ヲモ次ノ歌ノ首ニオモヒツトアルハ假名違ハルハコレハ其間ニ首落ルヤ

〇謎 拾遺集よつ子歌トテアルハ初ノ歌ハハテノ句ノコトハチ次ノ句ノハシメノ句ニヨメルヲ云リ但ニ  
 ハシメノ歌ノ末ニセナガ袖ヲモ次ノ歌ノ首ニオモヒツトアルハ假名違ハルハコレハ其間ニ首落ルヤ

此時の迷合を小野宮右衛門徳家の歌合一巻ありその初は  
 どののあはれをよめるのうらさむしものあつうよりいそぎ  
 けりあぞあつうをよめるは納をよめるあつうけりてあつう  
 があつうをよめるあつうの事あつうけりてあつうをよめる  
 けりあつうをよめるあつうの事あつうけりてあつうをよめる







美濃即ちうづ海牛を以てしとてありしげしき戦の中  
好むとてそをうづし草の物若継乃津お秋風のそ  
おれ跡なる萩の上をよみしはそを月とて心  
上の句おれ終あられはつ文字と下の句萩の上をよみしは  
き文字のこころは月とてあつてはそを好まをこれ物若の  
有しそ人のいふを四圍の刀麻糸とて心は阿波さぬき御  
と依の片若し終あられのこころは車牛放牛を  
物若とてや云ふ実否を不知渭北春天樹江東日暮雲これを藻  
と解心を渭北と退江東と退右のあとをその一字のこころ

右のたゞみうと有りしうまみ津代乃物若の戦國の時をやりし  
よや侍方名をも依の月若か成政がま阿波鳴門之助といひし  
物若のこころはこれとて心もや世類を不方しししそは九の淀河よ  
春風よ好むそをよみしは松をり永き日かよよある傾城  
傾城の門をりしはそをまらうとてくわくあはそおのき  
は知る古き謎なうし  
紀逸々雑活抄よ或人のいふはうつとひて謎を扱  
て知る古き謎なうし  
あは能活懐よかけあひりり水莖の園なをくを居るこれ  
内方あつては同五面の物若をこけよ角北二つ早童昌合  
期はとて同九の夜尾を秋日れうつては物若の唱をよみし



晦より尾尾まは秋日の短くもつゝきなをくあきや  
厚氷置きとけくあきまは宝命ニあき女の氣たをそくよも  
四方志す屋中ちりりりあきまをいひつるき寛文はあきま  
あきまの煙の謎の類あきまをいひつるしを知之し文字は  
謎あきまをいひつる無悪善とのまはあきまの類之千載集  
特あきまをいひつるあきまをいひつるあきまの心は愁といひあきまを  
あきまのあきまの類あきまをいひつる文字を解きあきまを  
面あきまをいひつるあきまをいひつるあきまの池田正武狂歌合  
外蘭をあきまをいひつる門をあきまをいひつるあきまの秋の月花をいひつる

これ今あきまをいひつるあきまをいひつるあきまの池田正武狂歌合  
あきまをいひつるあきまをいひつるあきまの池田正武狂歌合  
桂花叢唐馮翊太保令狐相出鎮淮海日使班蒙知從事俱  
遊大明寺之西廊忽覩前壁題云一人堂々二曜重光泉深尺一點去  
氷旁二人相連不欠一辺三梁四柱烈火燃漆却雙勾兩日全諸賓至  
而顧之皆莫能辨獨班支使曰一人非大字乎二曜者日月非明字乎  
尺十者寸土非寺字乎點去氷旁水字也二人相連天字也不欠一邊  
下字也三梁四柱烈火燃無字也漆却雙勾兩日全比字也以此觀  
之得非大明寺水天下無比八字乎衆皆恍然曰黃絹之奇智亦何



異哉中 鷄助編宋 筋屐之謎載于前史 鮑昭集中亦有之  
如一士弓張泉非衣金印乃千里草之類其原出于及止而詩  
人因作字謎何 王父輔 字謎多 舉多  
敬齋古今鞋治 鮑昭有井謎世傳東坡有賀資謎又黃庭  
堅有粥謎象棋謎近者伶官劉子才蓄木人隱語數十卷謎固  
小技倆然其諷詠比與固子 詩人同義而在士大夫事中亦談笑  
助也嘗擬井謎云四十零八箇頭還對一脚中間全無肚腸外面許  
多稜角此末聯亦借用前人語也嘗聞用字謎既久止記一二句  
今為足成之云三山自三山三山皆倒懸一月復一月還相連

左右排雙羽縱橫列二川蓋家都六口兩口不團口又聞墨斗謎  
云我有一張琴一弦在腹莫笑墨如鴉正盡人間曲この 墨斗ハ  
工匠の用了 墨つる 是ハ字を解き なるあ くのよ 常此謎之  
委巷叢談明 古之所謂庾詞即今之隱語也而俗謂之謎人  
皆知其始於黃絹幼婦而不知自漢伍舉曼倩時已有之矣至  
鮑照集則有井字謎杭人元夕多以此為猜燈任人商略永樂初  
錢唐楊景言以善謎名商謎の古枕夢遊録 懐子弘 永句 夜の 字月 いろはの 字ハ 松葉  
古今み あを 一ハ なるあ くのよ 常此謎之











南部の表を曆としてくわらぶものありしや文章を用ひば  
繪めくわらぶものありしや商人の看板より  
酒屋の看板を吊り醋の看板より編をせしおろ  
るは表方中より他りしや雅造醉狂集よりい  
かんらんとして凸凹のめ下結や文旨醋のうんらん  
瀧より字より條をせしおろし一種瓶の形を板より彫  
りしもの器物を目よりしよおろしものいへり傳  
家宝二集卷之七笑得好より條より笑話あり注は醋店  
招牌毎用葫芦様といへる宋人蓼花洲閑録は醋胡芦と

あり平家物語は保勢屋のいへりしや瓶子醋瓶あり  
東牆子に昆布屋より不二の山方形を物より水よりの看板あり  
富本よりし湯水より出現しよ云風呂屋は矢を出さしよ  
表の記述は六玉川初篇帳屋の表より二度雪が降帳屋より  
物より考よりし佐吉屋の市より無より大福帳を結付く事より  
よりのれ宗因千句より向ひの甲より病る目よりし看板のいへ  
る竹乃林あり又一種乃看板六玉川七目並ともあり何より人  
のいへり漢土あり眼科の看板より眼を画くよりいへり笑林  
卷二に見眼科招牌上画眼様教集とあり徳富屋は松を画く











其文字を祖徠心傳遠く二歩三歩とありしむあり祖徠  
古文辞を東野に諸ふりも早く肯察せしむのめて其向  
はれ過りありしむを異國人よとの致ぬなむ語り多き  
事あり理なく朱舜水よ或人きぬくの物乃名を同し中々草履云  
此小の居る浅渠を何といふ若きといふ小僕と云ふ  
小僕と云ふ後者といふことありしむ此は朝鮮板の日本国考略  
といふ書をよむに字語畧の中は僕といふに二字即と譯し  
小厮といふに歪皆水と訳せりありあり是も明人の日本人  
をいふに後者をいふに渠をいふに何といふを問ひしむ日本人の

彼ら後乃事し心得て之次郎と云ふしをいふに訳したるありん  
小厮は同じことありて前者前髪と云ふの義衆と云を以て付  
しつゝ訳し歪皆水はワカシの仮字之者乃類ありしむ  
○廻文 蕪若蘭といふ女夫の邊塞に居るを慕ひて廻文の  
詩を錦子織こして送せり此古事と名言く人の知る如く  
又南海の女子博論八花鉤枝鑑銘を以て唐の上元の初めのこと  
うや王勃に叙令孤楚の跋ありて皆口代換て稱賛せり  
廣東新語よ裁いと巧くあるものゝ又置字詩といふものあり  
東坡の妹聰慧あり事人よ過りしむ博學強記といふた



俳諧ニハ石田未得カ  
廻文百韵貞徳ニホス  
貞徳返事ノ奥書去  
年コレライツクトモナク  
モテ来レリ上古ノ歌仙  
モカダキ一ニテ廻文ハズ  
ナルヲ當時カクコトク  
自由自在ニツケラル  
死カ如キ衰ケル氣カ  
ニテハ、又ト、ケ申一サへ  
不成サテモ、奇妙ニホ  
云、正保二年壬戌月朔日  
七改九トアリ

文を他々秦少游の妻とあきり東坡を帰省せしむるに  
長歌を東坡の寄る坡これに讀み少し凝思するに妹の  
うらそといふ易く其文を余得し東坡歎く云汝を男子  
たらしめば名位あるべ我よりよあむといふに妹の置字  
詩を録して秦よりしるす秦もまた連環置字詩を他り  
く著ふよ東坡の妹女も其詩を効して他あり 禅喜集の  
いふなりこれをも異ふる後大納言為る佐後國をすの  
時やもよもよゆゆる長歌文字ごり等乃他あり  
歌連の懸物の事ハ著け集和歌篇を東瀛の往々る

宋未浦江吳渭倡  
月泉吟社賦田園雜  
真近體詩名士謝朝  
輩茅其高下詩傳  
者六十八清新尖刻  
別自一家

漢土めて詩を集めて賞物を出しし事元人吳渭が  
月泉吟社を盛事として徐氏筆精を出し随園詩話雍正  
の頃廣東の詩會その事何とあり ○大小五元集拾送  
大小吟 元禄十丁丑年 大庭を志らくしる表原を式するに大谷物證  
よ大小の他ありこれ延享より明和七年頃のものあり物を集め  
る 春ノ初メニコレヲ作リタルヲ摺物ニナシテ年玉三人ニ贈ル一モ其頃ヨリノ事ニ俳諧ノ  
歳且三ツ物ナトハ古ク有ニト見ユ年玉トハ年ノ賜モノニ新千載集諸人ニタマ物スラニ  
立春ノ初メノケラフ  
豊ノアカリハ







